

日本歯科評論 10

THE NIPPON DENTAL REVIEW

October 2011 No.828 Vol.71(10)



鹿児島大学大学院医学総合研究科 発生発達成育学講座 予防歯科学分野
於保孝彦先生 <私の研究室から>本文9頁

〈特集〉

インプラント治療における問題とその対応

—何をすればよいのか? してはならないのか?

春日井昇平・佐々木匡理・松下恭之・石川知弘・申 基詰・宗像源博

歯科用 CBCT 読像・診断に基づいた歯科臨床

1. 口腔外科領域への歯科用 CBCT の活用

佐々木妥啓・下島孝裕・嶋田 淳

“DH”あなたの出番です!

歯科衛生士が行うインプラント治療のための患者管理

—安心・安全なインプラント治療を目指して

亀井香奈子・松田博文

患者の一番大切なもの、 それは“時間”！

なかはら えつ お
中原 悦夫

医療法人社団協立歯科 クリニック デュボワ
〒100-0011 東京都千代田区内幸町1-1-1 帝国ホテルプラザ4階



戦後の復興期には、医療に“予約”という概念などあり得なかった。もちろん、“アポイント”という言葉が使われるようになったのも、おそらく1980年代に入ってからであろう。

当時は、診療の順番待ちで早朝から患者が自宅兼診療所の前に並び始め、時には隣家を越えて3軒先まで患者の列ができることもあった。夏ともなれば朝の4時くらいから並んでいる患者の話し声で目が覚める。冬には窓の外の真っ赤な揺れに驚いて目を覚ます。なんと一斗缶を持ち込んで焚き火が始まっていたのだ。しかし、寒い中並んでいるので文句も言えない。見かねた母は、ついに父に「予約にしてあげてくださいよ」と進言したが、予約どおりに診療が終わらないので、結局、早朝の順番取り合戦は終わらなかった。

ならばと、当時小学生だった私がアイデアを出した。“午前中の予約は朝9時に、午後予約は午後1時に受付します。9時台、10時台

……ご希望の時間帯をお知らせください”と貼り出した。これで早朝はゆっくり寝ることができるようになり、両親に褒められた記憶がある。

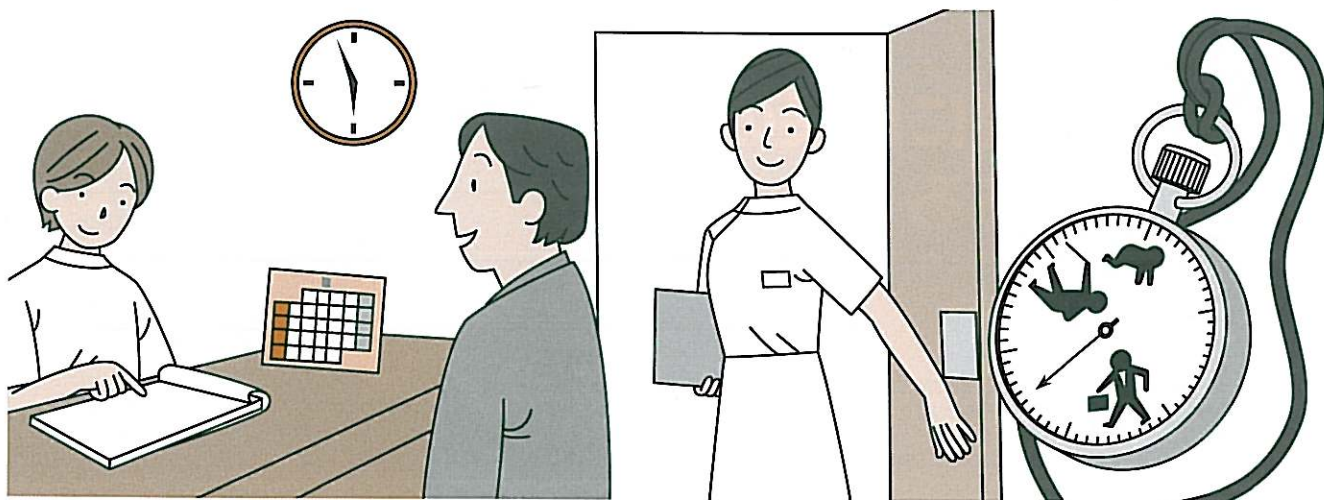
アポイントメントが意味するもの

「命とは、人が生きた時間である」——これを聖路加国際病院の日野原重明先生は、子供たちに命の大切さを教えるときのフレーズにしている。人間にとって一番大切なのは“時間”だということだ。命に限らず、現代人は時間に追われながら生きている。病院に通う時間は人生というレース中にピットに入るようなもので、その間はレースから外れている。入らずに済めばそれに越したことはない。みんなそう思いながら、やむを得ず病院に通っているのだ。

飛行機や鉄道、ホテル、レストラン、美容院、映画、そしてディズニーランドのアトラクションに至るまで、世の中に予約制が普及した今日、“予約”の意味するところは大き

く分かれる。1つは、サービスを提供する側の利便性だ。サービスの提供に必要な時間を確保することを目的とし、医療においては治療に必要とする十分な時間を確保するために予約を取っている。もう1つはサービスを受ける側の利便性で、自分のスケジュールの中にサービスを受けるための時間を確保することを目的としている。ここで両者の利便性が上手く一致すればいいのだが、どちらかに偏ることもある。

歯科医療におけるアポイントは、診療が始まる時間を約束するのが大半である。診療が終わる時間は、診療に必要な時間とその日の混み具合とで決まるため、通常は患者に決定権がない。同じ処置でもドクターの技量によって要する時間は全然違うが、患者にはその差がわかりづらいのでまかり通るわけだ。“身体相手の仕事だから終了時間も読めないのが当たり前”と、医療を提供する側にも受ける側にも暗黙の了解がある。



一方、診療の始まる時間と終わる時間の両方を約束した場合は、医療を受ける側の患者に大きなメリットが生まれる。患者は次の予定を組むことができる。ただその反面、医療を提供する側には大きなプレッシャーがかかってしまう。約束どおり診療を完結させなければならないからだ。しかしトレーニングを重ねると、技術力が備わるので固有のスピードが安定してくる。さらに、安定した固有の時間を揺るがす要因をあらかじめ視野に入れておくことで、リスクヘッジができるようになる。それはまさしく診断力とプランニング能力が研ぎ澄まされた証拠である。診療中あるいは手術中に起こり得るあらゆる現象を、事前に予知する能力が身に付いてくるわけだ。これは医療を提供する側の大きなメリットである。患者にも喜ばれ、われわれの技術や診断力も磨かれる、これほど双方にメリットがあることを積極的にやらない理由があるだろうか。

古代ローマ時代の奴隷の仕事、それが“サービス業”

仮に電気、ガス、石油、そしてガソリンのない社会を想像してみると、それは古代ローマ時代の社会と何ら違いはない。さらにもう1つ、古代ローマにあって現代社会にないとされるものが“奴隷”である。古代ローマでは、社会の基盤やインフラが多くの奴隷たちによって維持されていたといっても過言ではない。ローマ帝国が拡大するたびに、制圧した他民族を奴隷として連れ帰り、使用してきた。したがって、奴隷が主人に仕えることを *Serve* と言い、*Service* (サービス) の語源は奴隷用語そのものである。

当時は、荷物運び、身の回りの世話をする給仕、髪を扱う給仕、洗濯屋、石鹸代わりに使う尿集め、娼婦も兼ねる酒場や食堂のウエイトレス等、すべてが奴隷の仕事であった。また古代ギリシャ時代における医師

の地位は高かったが、古代ローマではその身分は非常に低く、医療も奴隷と被解放自由人の仕事であった。

*

“サービス業”という現代用語の本質は奴隷業そのものであり、医療を担う私たちの仕事も残念ながらその流れを汲んでいて、結局、サービス業としての医療の本質は、古代ローマ時代から何も変わっていないのかもしれない。そのことを現代社会はオブラートに包んできた。それにしても、患者を“患者様”と呼ぶ病院は、自らを奴隷として悟っているのなら潔いものである。

命の構成要素である患者の一番大切な“時間”を尊重し、“診療の終わる時間の約束”をも守ることは、古代ギリシャ時代のように、医療が名実共に高い評価を受けることの一助となるのかもしれない。われわれが患者の立場になったとき、誰よりも感動するのはわれわれ自身かもしれないのだ。